

---

# レディアントマイソロジー3 －暴走の成れの果て－

テイルズオブ俺たち

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

レディアントマイソロジー3 一暴走の成れの果てー

### 【Zコード】

Z6037Y

### 【作者名】

テイルズオブ俺たち

### 【あらすじ】

この小説は、色々な意味で想像力豊かな作者達の妄想が、やがて暴走を始めることになった作品である?  
ご覧になる場合は、覚悟して下され?  
バトン形式小説なのでこの先どうなるのかは知りませぬ。

## 「」の小説について

「」の小説はテイルズオブザワールド レティアントマイソロジー 3 の一次創作のリレー小説です。

バトンの順番はこんな感じ（敬省略）

鱗斗 夕影 刀剣士

「」の三人で回していきます。

ちなみに、バトンを回されるまで、どんな話になるのかは完全極秘、つまりストーリーに関しては話し合いを全くしていないため、マジで終わるまでどんな話になるのかは知りません。

よくわからない話になるかもですがそこは「」よろしく。

ちなみに、紹介やタグの荒ぶつようをみれば分かるように、色々やらかす予定です

それでは、話は「」れぐらいにして、いよいよリレーが始まります。  
見る場合は自己責任で

では！

第一話担当・鱗斗

## 01・少年、憑依、お兄ちゅうさん。

転生とは——簡単に言えば、生まれ変わる事。  
憑依とは——これまた簡単に言えば、靈などが乗り移る事。

ということはつまり、僕が今現在遭遇してしまったこの奇怪で、意味不明なこの状況は、ケータイ小説で大人気の転生、ではなく、憑依、なのだろうか。

つまり、なにを言いたいのかと言つと、僕の今の年齢は十七歳。なのに、それなのに、この肉体の年齢は——明らかに小学校低学年レベルのソレだったのだ——。

「——どうしてこうなった」

僕はただ今日新しく買ったゲームをしていただけだったのだ。

『テイルズオブザワールド レディアントマイソロジー3』

僕はそれをやっていた。その途中、突然ウトウトと眠くなってしまい、そのまま眠りに落ち、やがて目を覚ましたら、ここにいた。決して夢オチなんてものじゃない。その証拠に、何度も頬を抓つたり、叩いたりした。まあ、痛かつただけなのが。

とにかく、夢でない事は分かった。

——しかし、夢でないとしたら。この状況は、一体なんなんだ？

「まさか……」

とんでもないことが、僕の頭の中によぎる。

「僕は、死んだのか——？」

眠くなつたのは、死ぬ寸前だから。

眠つたのは、死んだから。

不意に、ガチャリと扉が開いた。  
ちなみに、僕が目覚めた場所は、ベッドが一つある小さな寝室で、  
僕が眠つていたベッドの隣のベッドのやけに整えられた布団や枕、  
燭台を見るに、ここはホテルーーといつよりも、小さな宿屋のよう  
だ。

「どうやら、気がついたようですね」

来客者は、ロックスであった。

……ロックス？って、あれ？

青っぽい色をした毛が、風で少し靡いている。

「あの……」

「本当、心配しましたよ、歩いていたら急にパタリと倒れてしまい  
ましたから……」

どこからどうみても、画面越しでしか見れなかつたが、それでも口  
ツクスだつた。

ということは、つまり。

ここは、レディアントマイソロジー3の舞台・『ルミナシア』の世  
界、だとこのかーー？

「お嬢様ー、キーヤ様がお目覚めになりました？」

「ほんと？」

部屋にまた一人、人が入る。

どうやら僕の名前は、キーヤのようだ。

その人は、綺麗な桃色の髪をしていて、今の僕の肉体年齢よりもす  
こし小さい、五歳くらいの少女だつた。

ロックスのこの呼び方からして、この小さな少女は、マイソロジー  
3のヒロイン・カノンノであつた。

「おはよー、キーヤお兄ちゃん 心配したんだよ~」

お兄ちゃん お兄ちゃん、おこひちゃん、おこーちゃん、おこーち  
やん……。

僕のなかで、その単語が何度もリピートされた。  
カノンノにそう呼ばれるなんて、なるほど、ここが天国か。  
今なら、死んでも構わない。  
もう死んだんだけね。

「それでは、キーヤ様もお目覚めになられたので、行きましょうか」  
その言葉で、僕は我に帰った。

「うん！ほり、行こつ、キーヤお兄ちゃん  
カノンノに腕をグイグイ引っ張られる。  
——正直、可愛すぎるんだが。

それはそつと、どうやら今までの会話から、僕はロックスとカノン  
ノと共に旅にでていたようだ。

恐らく、両親を失ったカノンノと、仕えるべき人を失ったロックス  
は、旅の道中で僕を——僕がこの肉体に入る前のこの肉体の宿主・  
キーヤを見つけて、一緒に同行させたのだろう。

そして、その道中。この肉体の元の宿主は倒れて——死んで、代わ  
りに僕の魂が憑依したのだろう。  
あくまで推測なんだけど。

カノンノは未だに僕の腕を引っ張つていて。ロックスは宿屋の代金  
を払う為、先に部屋から出ていったらしい。  
僕は、カノンノの頭に手を乗せて、撫でた。

「あつ……

少しだけ驚いた表情を見せたが、すぐに嬉しそうに笑った。  
手を頭から離す。

「む……

ちょっとだけ不機嫌そうな顔。

手を乗せる。

満足そうな笑顔。

何これ、可愛すぎる。

支払いを終えたロッククスが戻つてくるまで、僕はカノンノで遊んでいたのだったー。

そして、数年後。

僕らは、ギルド『アドリビトム』に加入することになった。

そして、僕らは世界の命運を分けるような、そんな物語の世界に足を踏み入れることになるのだったー。

to be continued . . .

## 01・少年、憑依、お兄ちゃん。（後書き）

何となく最初だから暴走しそぎもあれかなー、と思つたので、今回  
は暴走抑え気味。

正直、カノンノにお兄ちゃんと言わせたかっただけです  
プロローグ的な感じにしました。

それでは、次回の作者さんはー？

カノンノ「夕影お兄ちゃん？頑張つてね」

## 02・練習、自分、『誓い』と『償い』（前書き）

ども、第一話担当の夕影で、わこます +

大変遅くなりながら、なんとか第一話完成いたしましたが、つむ、  
素晴らしい程に内容がペラ一

ギャグの予定だったのに早くも第一話からこんな内容とか……ない  
わー

## 02・練習、自分、『誓い』と『償い』

僕が『』から『キーヤ・グラスバレー』に変わり、かれこれ数年が経つた。

ん……飛ばし過ぎ?……いや、だつて特に深い話はなかつたし……そ  
うだね……、敢えていうのなら旅の中で、アンジュ達……つまる所、  
本来の『マイソロ3』のアドリビトムメンバーと出会つて、色々あ  
つて彼女達に雇われて（当初、主にロックスが）、それでもまたそこ  
から色々あつて、ギルド『アドリビトム』が出来た事だろうか。

：それで一応話を戻すけど……ギルド『アドリビトム』出来て早一週  
間が経つんだけど……いまだに一つも依頼は来ていないので。

何故か、と言えば当然出て來るので一番始めに出るのは知名度の問  
題。

一応、ある程度の街にはチラシとか貼つたり配つたりしたけど、ま  
だ出来たばかり故に、何か依頼が来て成功させて評判を上げない限  
りは、早々依頼は来ないだろう。

……それで、依頼がいまだに来ない現在、僕は何をしているかと言  
うと……

「……いつ……かな……?」

「　はい。上出来ですよ、キーヤ様」

……ロックスに魔法を教わつてました。

僕が『キーヤ・グラスバー』として生きる為に幾つか決めた事があるんだけど…その一つが、『ちゃんと戦えるようにする事』である。

この世界が『マイソロ』であつて、僕がロックスやカノンノと関係を持つている以上、アドリビトムに加入して、依頼を受ける事はほぼ確定しているに等しいと思った僕は、何があつてもちゃんとに戦えるよ!ひじょうに考へた。

それで僕は、僕とカノンノがまだ小さい頃、旅をしている中で雇っていた傭兵さんと一緒に戦つてたロックス（今思い出せば、かなり異様な光景だつた）に『自分なりの戦い方』を教わり始めたんだけど…僕…というかこの『キーヤ・グラスバー』は予想以上なもやしちゃ子だった。

一応至つて健康なんだけど、見た目が何でも反射する某片道通行さんばかりにもやしで、いざ戦い方を教わりだせば…剣や斧を振るえば少し動いただけで体力がきれるわ、今度は拳を試してみれば一人人形殴つただけで脱臼しかけるわと…接近戦はてんで駄目であった。

その反面、魔法に関してはかなり良いと言えるレベルであった。

ロックスに教わった事もあり、今では初級魔法を無詠唱で発動出来るようになった。

魔法が使えた時はあまりの事に感動しかけたのはよく覚えている。

…それで今現在は上級魔法を覚える事や中級魔法の詠唱時間を縮める事に頑張ってるけど…そう簡単に上手くはいかないみたいである。

「…んー…もうちょっとぐらい詠唱時間を縮めたいんだけど…」

「それはいいかもしだせんが今日はここまでです。これ以上の詠唱短縮練習は、キーヤ様の体に響くかもしれませんから」

「ん…そうだね。ありがとう、ロックス」

僕がそう言つて礼をすると、ロックスは『いえいえ』と笑顔で応えた。

今思えば本当、ロックスって凄いよね。

僕に魔法教えたり、カノンノに戦い方教えたり、アンジュにナイフ捌き教えたり、傭兵さんと一緒にガチ戦闘したり……アレ、リアルチートじゃね？

「お兄ちやーんっ！…」

「…………？」

ロックスの恐るべき才能に思わず苦笑いしていると、ふと扉が開く音とそんな声が聞こえ振り向くと……。

「どうしたの、カノン 「ビーーんっ！」 のうふつ！」

妹であるカノンノが、勢いよく僕のもやしボディに突っ込んできた。死ねる。別に嫌ではないけど僕のもやしボディにとつては肉体ダメージ1000クラスだろう。

「ゴフッ…ゴフッ……どうしたの、カノンノ…？」

なんとか耐えきつてカノンノを受けきり、僕に突っ込んだままのカノンノに問い合わせる。カノンノは僕の問いにっこりと笑つてみると…。

「えへへ…お兄ちゃんに会いたくなっちゃって」

「（）ふうつ

カノンの口から出たその言葉に思わず口からなんか出かけた。うん、死ねる。言つなれば僕の精神に10000ダメージだろう。というか何この妹、超可愛いんですけど。

凄い今更だけど、僕が『キーヤ・グラスバレー』として生きる為に決めた事の中で、一番重要にしている事がある。

僕が憑依する前の『キーヤ・グラスバレー』が一体どんな人間だったのかは僕は分からない。

そして、僕が憑依した原因である死因も。何かの病気だったのかもしれないし、はたまた…憑依してしまった僕が原因かもしれない。

改めて…居なくなってしまった元である『キーヤ・グラスバレー』『彼』の代わりに、今の『キーヤ・グラスバレー』『僕』に出来る事は…妹であるカノンと、執事であるロックスを悲しませない為に『彼』として『僕』が生き続ける事だ。

…綺麗事かもしれないし、『彼』の代わりになりきれるかは分からぬけど…それが僕に出来る、『彼』に向けての精一杯の『誓

い』であり『償い』だ。

だから、『キーヤ』…

「 ？お兄ちゃん…？」

「ん……何でもないよ」

『キリ』に応えられるよう』、僕はカノンとロックス、そして『キリ』の為に生き続けるよ。

## 02・練習、自分、『誓い』と『償い』（後書き）

第一話からややシリアスふかせましたが……駄目だな、自分

改めて合作の難しさを実感致しました；

ギャグる予定だったのになー……よし、次の人任せようつーーー（  
無茶ぶり

ではでは、次回のお話を

カノンノ「頑張つてね、刀剣士お兄ちゃん」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6037y/>

---

レディアントマイソロジー3－暴走の成れの果て－

2011年11月30日13時55分発行